

十一月 同朋会
十一月十四日 第二土曜
 時間 午後一時から三時
 場所 徳泉寺本堂
 持ち物 念珠・勤行本
 無料（茶話会は行いません）
 どなたでも参加できます。



『徳泉寺報』編集後記
 徳泉寺が開山してから
 340年余り、毎年続いて
 きたであろう報恩講。今
 年は今年の精いっぱい
 をお勤めさせていただきました。
 続けることは変わ
 ること。臨機応変に変わ
 り続けることが変わらず
 続けていくことだと気づ
 かされました。詳しい様
 子はホームページでぜひ
 ご覧ください。

境内の花々



桂（カツラ）



十月同朋会より

住職法話一部抜粋 「報恩講のお勤め」について

毎年、報恩講では親鸞聖人のご命日法要として親鸞聖人の執筆された『正信偈』をお勤めします。この『正信偈』は一番身近な偈文（ゲモン・親鸞聖人の執筆された文）で同朋会でも毎回必ずお勤めしています。文字に楷書、草書、行書、と書き方によっていろいろな書き方があるように、偈文の唱え方にも発声の仕方によっていくつか種類があります。いつものお勤めは「草四句目下（そうしゅくめさげ）」と言って四句目を下げる唱え方。そして報恩講は、より重いお勤めとされる「真四句目下（しんしゅくめさげ）」です。四句目を下げるのは普段のお勤めと同じですが特別なお勤めのため、音の伸ばし方や読み方に独特の法則があります。一年に一度しか唱える機会のないお勤めを大切にいただきましょう。（今回の同朋会では声明の練習として、みなさんと一緒に少しずつ読み進めました。）

前任職法話一部抜粋 「楽邦に帰す」

先日、OHOキャンペンにあやかって、秋田・青森と旅行してきました。その道中「不老不死温泉」に寄ったのですが、大変不便な場所にも関わらず、ずいぶん大勢の人で賑わっていました。思うにこの「不老不死」、老いず死なず、ということに魅力を感じ訪れる人が多いのでしょうか。しかし、です。老いない、死なないということがあるのでしょうか。

このことだと思いついたのが『正信偈』の「三蔵流支授浄教 焚焼仙経帰楽邦」という部分です。これは曇鸞大師のエピソードなのですが、大集経というお経を訳そうとした大師が途中で病気になる、どんなに志があっても体がだめになつたら元も子もない、と長生不死を教義とする道教を学ぶことにします。免許皆伝を得て喜び勇んで自慢したところ「仮に長生の命を得ても煩惱の命をただただ廻るだけではないですか。本当に生きることと違うことで時間が過ぎるだけではないですか。」と言われ、ハツとします。そして仙経を焼き捨て、観無量寿経「永遠の命を観る経」を得るのです。

さて、永遠の命、とは何でしょう。ただ、時間が過ぎても生きることにならぬ、長生不死を求めるのは自分ではない外側に何かを求めていくに過ぎません。仏教は内道。生きるという中身がどうであったか、本当に私は生きたという実感があるのか、生きる命とは何だろう、観無量寿経は問い続けていきます。

どんな命も、命そのものは休むことなく生きています。そして生きたいと願っています。ただ、その命が生きにくい状況を周りが作ってしまったということがあるのではないのでしょうか。